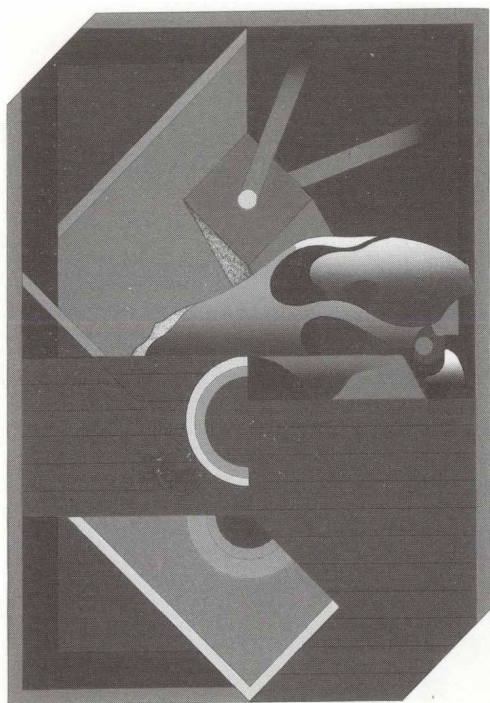


日本探偵作家論

田萬治



悠思社

権田萬治(ごんだ・まんじ)

昭和11年(1936年)東京都生まれ。東京外国語大学フランス語科卒業。社会心理学専攻。昭和35年に「感傷の効用——レイモンド・チャンドラー論」を『宝石』誌に発表。昭和51年、『日本探偵作家論』で日本推理作家協会賞を受賞。

現在、推理作家協会理事、横溝正史賞選考委員、マスコミ倫理想談会全国協議会顧問、文芸家協会、ペンクラブ各会員、専修大学文学部助教授。

著書に『女流名探偵に乾杯!』(悠思社)、『現代推理小説論』(第三文明社)など多数。

日本探偵作家論

1992年 6 月15日印刷

©1992

1992年 6 月25日発行

編 者 権田 萬 治

発行者 岩 田 堯

印刷・製本 学伸図書印刷

発 行 所 悠 思 社

〒102 東京都千代田区三番町20-1

飛柴三番町ビル5 F

TEL 03-3288-0951代

FAX 03-3288-9598

落丁本・乱丁本は、お取り替えいたします

ISBN4-946424-26-1 C0095

Printed in Japan

■初出掲載誌一覧

- 序説 深海魚の夢―戦前の探偵小説の特質
解剖台上的のロマンチズム―小酒井不木論
閉じ込められた夢―江戸川乱歩論
理化学実験室の悪夢―甲賀三郎論
残酷な青春の鎮魂曲―大下宇陀児論
田園の夜の恐怖―横溝正史論
黒き死の讃歌―水谷準論
美しき錯覚の詩学―葛山二郎論
美女と野獣の残酷劇―橋外男論
漆黒の闇の中の目撃者―山本禾太郎論
宿命の美学―夢野久作論
秘められた科学恐怖の夢―海野十三論
三角関係の殺人劇―浜尾四郎論
廃虚の美―渡辺啓助論
迷宮の世界―小栗虫太郎論
探偵小説と詩的情熱―木々高太郎論
蒼き死の微笑―大阪圭吉論
死霊の群れを呼ぶ風景―蒼井雄論
海底散歩者の未来幻想―蘭郁二郎論
- 書下し
『幻影城』昭和50年2月
『宿命の美学』昭和48年4月
『幻影城』昭和50年3月
『幻影城』昭和50年4月
『幻影城増刊』昭和51年3月
『幻影城』昭和50年12月
『幻影城』昭和50年5月
『幻影城』昭和50年11月
『幻影城』昭和50年8月
『みすてりい』昭和39年10月
『幻影城』昭和50年9月
書下し
『寶石』昭和38年1月
『成層圈魔城』昭和46年7月
『寶石』昭和37年4月
『幻影城』昭和51年2月
『幻影城』昭和50年6月
『幻影城』昭和50年10月

目 次

序説 深海魚の夢―戦前の探偵小説の特質

3

解剖台上のロマンチズム―小酒井不木論

13

閉じ込められた夢―江戸川乱歩論

26

理化学実験室の悪夢―甲賀三郎論

52

残酷な青春の鎮魂曲―大下宇陀児論

65

田園の夜の恐怖―横溝正史論

78

黒き死の讃歌―水谷準論

100

美しき錯覚の詩学^{ポエジ}―葛山二郎論

112

美女と野獣の残酷劇―橘外男論

126

漆黒の闇の中の目撃者―山本禾太郎論

140

宿命の美学―夢野久作論

154

秘められた科学恐怖の夢―海野十三論

164

三角関係の殺人劇―浜尾四郎論

179

廃墟の美―渡辺啓助論

194

迷宮の世界―小栗虫太郎論

206

探偵小説と詩的情熱―木々高太郎論

221

蒼き死の微笑―大阪圭吉論 243

死霊の群れを呼ぶ風景―蒼井雄論 258

海底散歩者の未来幻想―蘭郁二郎論 272

対談「探偵小説」の時代 紀田順一郎 286

権田萬治

あとがき 317

人名索引 321

作品索引 330

装幀 中島かほる

装画 黒崎 彰

日本探偵作家論

序説 深海魚の夢——戦前の探偵小説の特質

深い、深い海の底。表面は青く澄んだ透明な海の水もこの深さではもはや強烈な太陽の光をまったく受けつけない。その漆黒の闇の中で自らの発光器の放つ妖しい燐光を頼りに生きる深海魚の群れ。ある者は眼球が飛び出るくらい目が大きく、ある者は目がすでに退化している。奇怪でグロテスクな風貌をしたかれらは、闇の中でどのような夢を見ているのであろうか。

戦前の探偵小説の特質を考えようとするとき、ふしぎなことに私の頭の中に、このような深海魚の孤独な姿が浮かび上がって来る。論理的な合理性よりも非合理的な夢、厳しい社会的現実よりも華麗な死のユートピア幻想。戦前の探偵作家の企てたさまざまな個性的な冒険も、つまるところ、暗い時代の下に秘めやかに生み出された疎外者の夢であり、歴史の暗部に輝く蒼白き燐光のごときものではなかったか。

戦前の近代探偵小説をかりに『新青年』の創刊と江戸川乱歩出現以後と考えた場合、その著しい特質は、社会的現実に向けた怪奇幻想や猟奇的な夢幻の世界に遊ぶ作品が圧倒的に多いということである。このことは裏返せば、論理的なパズルの興味を中心とするいわゆる本格探偵小説がきわめて少ないということを意味する。

江戸川乱歩は「日本探偵小説の多様性について」（『改造』昭和十年十月号）という評論の中で、「日本の探偵小説の過半数は本当の探偵小説でないといふことが云はれてゐる」ことに同感の意を表しながら、「論理的探偵小説はあくまで論理に進むのがよい。犯罪、怪奇、幻想の文学は、作者の個性の赴くがままに、いくら探偵小説を離れても差支はない。そこに英米とは違つた日本探偵小説界の寧ろ誇るべき多様性があるのではないか」（昭和十年）と述べている。

事実、西欧的な論理に重点を置いた優れた作品としては江戸川乱歩の「二銭銅貨」（大正十二年）をはじめとする初期短編群、甲賀三郎の「琥珀のパイプ」（大正十三年）、「ニッケルの文鎮」（同十五年）、「蜘蛛」（昭和五年）、葛山二郎の「杭を打つ音」（昭和四年）、「赤いペンキを買つた女」（同）、海野十三の「爬虫館事件」（昭和七年）、「人間灰」（同九年）、浜尾四郎の長編『殺人鬼』（昭和六年）、小栗虫太郎の「完全犯罪」（昭和八年）、大阪圭吉の「とむらい機関車」（昭和九年）、「石堀幽霊」（同十年）、蒼井雄の長編『船富家の惨劇』（昭和十一年）など数えるしかなく、これらの作品にも怪奇な要素の強いものがある。

これに対し、完全な怪奇幻想の系列に立つ秀作は、江戸川乱歩の「人でなしの恋」（大正十五年）、「押絵と旅する男」（昭和四年）、小酒井不木の「恋愛曲線」（大正十五年）、横溝正史の「面影双紙」（昭和八年）、「かいやぐら物語」（同十一年）、水谷準の「おーそれーみを」（昭和二年）、「胡桃園の青白き番人」（同五年）、山本禾太郎の「抱茗荷の説」（昭和十二年）、夢野久作の「あやかし鼓」（大正十五年）、「瓶詰地獄」（昭和三年）、渡辺啓助の「偽眼のマドンナ」（昭和四年）、小栗虫太郎の長編『黒死館殺人事件』（昭和九年）などをはじめ枚挙にいとまがないくらい多くの

作品がある。

これら二つの対照的な流れの中間に木々高太郎や大下宇陀児などの作品を加えれば、戦前の大ざっぱな傾向はほぼ概括できると考えられるが、総じていえることは、現実的な社会環境を舞台に犯罪の論理的解明を試みる西欧型の探偵小説 detective story とは対照的に、異常な状況設定の下での倒錯した愛や歪んだ欲望を描く獵奇的、幻想的な作品が数多く見られるということである。

このような日本の戦前の探偵小説の独特な性格は、どのような理由で形作られたのであろうか。

まず、第一に考えられるのは、日本人の非論理的な性格である。ドイツ観念論に典型的に見られる抽象的な概念を展開する厳密な論理性は、日本の伝統的な物の考え方とおよそ異質であり、日本人の発想法は概して、論理を貫く論理性よりも、物事を情緒的に理解する心情重視の傾向が強い。

仁戸田六三郎は『日本人』の中で、「日本人は記紀の昔から自然には驚くべき傾倒性を持っていた。自然に対する観察には比類なきセンスを持ちながらも、それが科学にならなかつたのは、自然に対する態度と方法に相違があつたからである。それは自然を客観的にはどうしても見られないということである」と日本人の実存的な傾向を指摘し、さらに次のように書いている。

「実存的に見るということは、人間としての、そして自分自身としての意識を通して見ることである。自然の対象自体に主体性を置かないのである。心理学的に言えば実存的な場合は情意が主

体となつて、知性は副次的な作用を行うに過ぎない」

少々難解だが、要するに、日本人は論理的というより情緒的であるということであろう。こういう日本の読者にいわゆる本格ものを受け入れる余地が少なかつたということはいえるだろう。

さらに、戦前の探偵小説において論理性が重視されなかつた原因の一つには、絶対主義天皇制という非民主的な国家構造があつたことも考えられる。探偵小説は論理によつて犯罪のナゾを解くことを主眼にしているが、それは同時に、拷問など暴力による自白の強制がなく、恐るべき犯人と名探偵が同一平面上で知的闘争が行える社会的基盤がなければならぬ。ところが戦前の日本では、物的証拠よりも自白中心の犯罪捜査であり、国家権力によつて犯罪そのものがでつち上げられることも多かつたのである。

「イタリーやドイツのように、独裁政府が輸入探偵小説を読ませないようにするのも、よくわかる。なぜなら、あきらかに、理性の修練ときつてもきれない探偵小説という文学形式が、プロパガンダを無批判的にうけいれさせなければやってゆけない略奪的な支配権によつて歓迎されるわけがないからだ。総裁^{フューラー}原則と論理的思考とは、ただ水と油のような相いれないものだ！」とはハワード・ヘイクラフトの「娯楽としての殺人」の中の言葉だが、戦前の探偵小説が不良少年の読み物として白眼視された原因の一つには、一部の探偵小説のエロ・グロ・ナンセンスへの傾斜もさることながら、犯罪に関する論理的追及を余り歓迎しない社会的風潮があつたことも考えられる。それはやがて一つの社会批判にまで高まる危険があるからである。小酒井不木の作品には論理的な推理よりもいかに犯人を自白させるかに重点を置いた作品が多いが、こういうところに

も、日本の特殊な事情が反映していたともいえよう。

第三の理由は、江戸川乱歩をはじめとする日本の近代探偵小説が、谷崎潤一郎や佐藤春夫、芥川龍之介など芸術至上主義的な傾向の文壇作家の影響を強く受けて出発したことが挙げられる。

谷崎潤一郎は文壇に登場した直後から大正時代にかけて「秘密」(明治四十四年)をはじめ、「ハッサン・カンの妖術」(大正六年)、「人面疽」「白昼鬼語」「柳湯の事件」「金と銀」「途上」など数多くの探偵小説的色彩の濃い作品を発表した。一方、佐藤春夫も「指紋」(大正七年)を手始めに、「女誠扇綺譚」「家常茶飯」「発見」などかなりの数の探偵小説を書いている。

しかし、かれらの探偵小説は江戸川乱歩のいう「主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学」(「探偵小説の定義と類別」)では必ずしもなかった。谷崎潤一郎の作品には、かなりトリックを配した作品が多いが、「もしもいはゆる探偵物の作家が、最後までタネを明かさずにおいて、読者を迷はせることにのみ骨を折つたら、結局探偵小説といふものは行き詰まる外はあるまい」と述べているように、もともと純文学作家であるだけに、人間の悪に対する人間学的な興味を中心とするものが多いのである。

一方、佐藤春夫は有名な「探偵小説小論」(「新青年」大正十三年八月号)で、さらに次のように明確に独自の主張を展開している。

「要するに探偵小説なるものは、やはり豊富なロマンチズムといふ樹の一枝で、キエリオスタイル 奇**バシテイダ** 異の果実で、多面な詩といふ宝石の一断面の怪しい光芒で、それは人間に共通な悪に対する妙な讚美、怖いもの見たさの奇異な心理の上に根ざして、一面また明快を愛するといふ健全な

精神にも相ひ結びついて成り立つてゐると言へば大過はないだらう。そして或る作者と読者とは悪の讚美に感興を置き、或る作者と読者とは明快への愛情にその興味をつなぐ。人々の随意である」

かなり柔軟な考え方だが、佐藤春夫の作品についていえば、「明快への愛情」よりも、「悪の讚美」に重点が置かれていることは否めない事実である。

江戸川乱歩は「白状すると、私は潤一郎、春夫、浩二といふ順序で傾倒して来たものである」(「宇野浩二式」大正十五年)と告白しているし、横溝正史も、「現在探偵作家と呼ばれているひとびとのうち、戦前派に属する作家たちの大部分が、いろいろな意味で谷崎先生の文学の影響を、ひじょうに大きくうけていることは否定できないようだが、とりわけわたしはそれがひどいようである」(「谷崎先生と日本探偵小説」昭和三十四年)と語っているが、山本禾太郎などを含めると谷崎潤一郎は日本の探偵作家にもっとも大きな影響を与えた文壇作家であるということがいえるだろう。そしてその影響が、日本の探偵作家を本格ものよりもむしろ、いわゆる変格探偵小説の方向に向かわせたこともまた疑いをいれない。

さらに、もう一つの外的な要因として、日本の戦前の近代探偵小説が短編中心に発展したことが挙げられる。

大正九年に創刊された『新青年』は創刊号から十枚の創作を募集、また、大正十一年に誕生した『新趣味』も二十枚の小説を募集した。この懸賞の中から横溝正史、水谷準、角田喜久雄、甲賀三郎、葛山二郎などが登場したのだが、このような厳しい枚数制限の中で、トリックなどをき

め細かく論理的に展開することはもともと無理な相談ともいえるのである。当時の作品が、意外性をねらったピーストンや恐怖怪奇の味を漂わせたルヴェルなど海外の作品の影響を感じさせたのも、一つには物理的制約のせいかも知れないのである。

多くの登場人物を擁する犯人捜しや重厚なアリバイ崩しなど、メイン・トリックのほかに多くのサブ・トリックや小道具を使つたいわゆる本格ものには短編よりむしろ長編が適しているといつてよいが、戦前の日本の探偵小説は大体において短編中心であつたため、優れた本格長編はきわめて少ないのである。江戸川乱歩も「日本の探偵小説」の中で、日本の探偵小説壇の特殊事情の第一に、このような日本の特異な出版事情を挙げているが、このような物理的制約が本格ものの発展を妨げたとは必ずしも規定していない。しかし、そういう側面も必ずしも否定できないのではなからうか。

現に、純粹本格派として知られる甲賀三郎は、「短い枚数の探偵小説は當に行詰り易いだけでなく、トリックが目立つて、いかにも窮屈で且つ子供ばいものである。乱歩君は行詰るよりもその子供ばい点で、書く事を続けなかつたのであらうか。それは兎も角として、江戸川君の転向と共に、真先にそれに続いたのは故小酒井不木君であつた。さうしてそれらの作品はいづれも異常心理や病的な事を取扱つたもので、決して探偵小説ではなかつたが、当時は別に喧しい議論もなく、便宜上探偵小説として分類されてゐた。然し、故平林初之輔君は之等の作家を不健全派と呼んだ。後に不健全は穩当でないといふ抗議があり、遂に変格探偵小説と呼ぶに至つたのである」(「探偵小説講話」昭和十年)と指摘している。その甲賀三郎が、いわゆる変格探偵小説をシヨ―